

# 文化財だより

No.5

発行：藤里町教育委員会  
〒018-3201  
秋田県山本郡藤里町藤琴字家の後67  
TEL 0185-79-1327  
FAX 0185-79-2227  
E-mail : kyouiku@town.fujisato.akita.jp

## イベント情報

## 白神山地世界遺産センター藤里館

歴史民俗資料館  
出張特別展示

## 白神の鉱山『太良』展 開催！



会場には藤里町歴史民俗資料館の収蔵品ほか、様々な資料が並ぶ。  
(写真は平成29年度の様子)

平野庄司切り絵原画展

期間：2/14(日)～3/29(月)10:00～16:00 まで

場所：白神山地世界遺産センター藤里館

その他：月・火曜日休館 入館無料

白神山地世界遺産センター藤里館で、2月14日(日)から、特別展示「白神の鉱山『太良』展」が開催されます。

この企画展は、冬期閉館中の町歴史民俗資料館の収蔵品の活用や、町の歴史に興味をもつきっかけ作りを目的として、平成29年度から毎年開催しているものです。

「太良鉱山」は藤琴川の上流部に位置し、主として鉛を産出した鉱山で、鎌倉時代に開山したと言われています。昭和33年の大水害の影響を受けて閉山となるまで、600年以上も続いた鉱山で、藤里町の歴史を考えるうえで、非常に重要な鉱山です。

会場には、かつて太良鉱山で実際に使用されていた道具類や、秋田大学附属鉱業博物館や秋田県立博物館から特別貸し出しを受けた鉱石の標本などが解説パネルと併せて展示されます。

今回の展示は、平成29年に行った同テーマの展示内容をベースに、新たな資料や解説を大幅に追加しています。

「白神の鉱山『太良』展」は、3月29日(日)まで開催予定です。沢山の方のご来場をお待ちしています。

## Pick Up! 文化財 ～第4回「笹ゲラ」～

### 100%天然素材 地域色あふれる伝統の雨具

今回紹介するのは、「ササゲラ」という雨具の一種です。全国的には「ミノ」と呼ばれる雨具の事を、秋田県内では「ケラ」と呼びます。

雨具の一種ではあるものの、主に背中を覆う構造で、物を背負うときの肩当てのようにも作られています。

そのため、雨が降らなくても野良仕事に着用する場合もあったし、休憩の際の「ゴザ」代わりに使う場合もあったといえます。

ケラの材料は、地域によってさまざまな物が使われ、一般的には山ブドウの樹皮やワラ、スゲ、マダなどが使用されます。

そんな中で、他の地域ではあまり見られない「笹」を材料とするのがこの「ササゲラ」で、藤里町の指定文化財(有形民俗)になっています。

このササゲラは、1本の笹から、若葉1枚のみを採って使用し、1着のササゲラを作るためには数百本の笹が必要になるという、非常に手間のかかる代物です。編み方も独特で、当町以外の地域ではほとんど見られないものだと言われています。

藤里町歴史民俗資料館に展示されている「ササゲラ」は、昭和50年代に町内の職人によって作られたものです。なお、資料館にはササゲラの他に、シナノキや山ぶどうの樹皮で作られたケラも収蔵されています。

機会があったら、様々なケラを見比べてみるのも面白いかもしれません。



他の地方ではあまり見られない、笹の葉を材料とした「ササゲラ」  
(藤里町歴史民俗資料館所蔵)

# 郷土史探求

## ～ 第4回 粕毛地区～

現在の「藤里町」は、初めから一つの町として誕生したわけではありません。

現在の藤里町は、古くは太良鉦山村、藤琴村、矢坂村、大沢村、そして粕毛村の5つの村に分かれており、明治時代以降徐々に合併が進んで行きました。

太良鉦山村、大沢村は藤琴村に合併、矢坂村は粕毛村と合併し、昭和30年に藤琴村と粕毛村が合併して「藤里村」が誕生。現在の藤里町の前身となりました。

今回取り上げる粕毛地区は、室町時代に加嶋運慶という仏師によって創始されたとの伝説が伝わっています。

運慶は京都出身の仏師で、どのような経緯でこの地にやってきたか定かではありませんが、なかなか徳のある人物だったようで、近隣からこの仏師を慕う人々が集まり、やがて村ができたといえます。

なお、粕毛村の草創については、他にもいくつかの説があり、「藤里町史」などでも紹介されています。

興味のある方は、是非調べてみてください。

江戸時代に入ると、粕毛村は隣の藤琴村と同じく、佐竹家の重臣・梅津政景の知行地（※殿様から与えられた領地）となりました。

政景は秋田藩の鉦山開発に特に大きな功績のあった武将ですが、新田開発にも力を入れていました。

政景の日記には、現在の能代市二ツ井町の新田開発のため、近隣の肝煎（※村の代表者）などと協力しながら、藤琴川から農業用水路（岩堰）を引くための工事を行ったことが記されています。

また、江戸時代に全国各地を旅した旅行家・菅江真澄もまた、粕毛に立ち寄っており、その際の様子を絵と文章で記録しています。

真澄は、粕毛川沿いに上流方面へ向かい、素波里峽の様子を見て「桃源郷に来たようだ」と表現しています。現在はダムの底となっている場所なので、残念ながら真澄が見た風景を見ることはできません。

粕毛に関するエピソードで外せないのが、明治天皇も味わったという「粕毛鮎」に関するものでしょう。

明治天皇が本県御行幸の際、二ツ井に宿泊された時のこと、粕毛川産の鮎30匹が生きのままに届けられました。

水槽で元気に泳ぐ鮎を見た明治天皇はお喜びになり、食事の係の者に「20匹はすぐに料理するように。10匹は生かしておいて、翌朝調理するように」とお命じになった…という出来事です。

明治天皇に献上したという出来事は粕毛鮎の名を高め、現在もシーズンになると、たくさんの釣り人がこの「粕毛鮎」を求めて川に入る姿を目にします。



世界自然遺産・白神山地に源流を持つ清流・粕毛川

## 「夜回り」のこと

粕毛地区では、夜間に集落の人々が交代で拍子木を打って回る「夜回り」の伝統が現在も続いています。

以前は各地の集落で行われていたようですが、生活習慣の変化などの影響で徐々に姿を消し、現在も継続しているのは、藤里町内では唯一、粕毛地区のみようです。

粕毛地区の夜回りは、地元では「バンチョウ」と呼ばれており、具体的にいつ頃から始まったものかは定かではありませんが、火災防止の注意喚起を主な目的として行われているものです。

以前は「火の用心」という掛け声もかけながら集落を回っていたそうですが、現在は拍子木のみとなっています。

昔は集落の全戸が輪番で夜回りを行っていましたが、近年は高齢化等の影響もあり、参加することが難しい高齢の世帯や、女性のみ世帯を除いて、約20軒ほどで夜回りを行っているとのこと。

この夜回りは1年365日、1日も欠かすことなく行われているそうです。

地域住民による防災のための自主的活動は、東日本大震災以降、特に注目されるようになりましたが、それよりずっと以前から、粕毛地区では、集落全体で防災に取り組んで来た歴史があると言えるでしょう。

## 編集後記

文化財だより第5号、いかがだったでしょうか？

令和二年は新型コロナウイロスの影響により、多くのイベントや行事が中止となり、藤琴豊作踊りや大沢壮士舞も上演が見送られました。

ニユース等を見ていると、各地で「一度行事を中断してしまおうと、伝統が途絶えてしまうかもしれない」という危機感を持っている保存団体も多いようです。

「コロナ対策」と「伝統の継承」の両立が求められるという、大変難しい状況ではありますが、現在継承されている様々な伝統文化は、時の流れにも、生活様式の変化にも負けずに継承されてきた、地域の誇り、地域の宝物です。コロナに負けず、次の世代へ継承されていくことを切に祈ります。

藤里町教育委員会

皆さんのご意見・ご感想  
お待ちしております！